

## 周産期における看取りケア

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
人間形成・臨床教育クラスター  
戸田 千枝

命を育む周産期の医療現場では、どんなに医療技術が高度化されても、依然として15%前後の予期せぬ流産と死産があり、少子化が社会問題とされながらも、さらに年間22万件の中絶が、母体保護法により、本人及び配偶者の同意を得て実施されている。つまり、周産期の医療者は、一方では誕生を見守る支援をしながら、他方では赤ちゃんの死の場面を数多く経験している。周産期臨床にかかわる助産師は、死産の時にも出産と同じように、亡くなっている赤ちゃんが母体からこの世に生まれ出てくるまでのケアを行っている。その経験は助産師にとって、大きく心を揺さぶられるものであり、自分のどこかにしこりを残すような辛い経験でありながら、生涯を通じて心に残る経験でもあり、ある時にはその経験が何かの転機となっている場合が少なくない。しかしながら、助産師に何らかの転機もたらず、その経験そのものに目を向けた研究はほとんどなく、したがって、その経験がどのような構造でなりたち、助産師に何を働きかけているのかということは、明らかにされてはいない。

本稿では、数多くの死産のケアをする助産師の、経験はしているが自覚せずにいた感覚的なものを含めた経験が、どのような成り立ちをし、どのような意味を持っているのかを明らかにすることを目的とした。その方法は、従来の研究では、明らかにされていなかった、はっきりと自覚していなかった過去の経験に接近するために、同じような経験を持つ助産師同士の対話を記述的に探究した。対話することによって、互いの経験に触発されつつ語り合うことは、自分が意識的には気がつかなかった過去の経験の次元へと接近できる可能性があり、自覚せずにいた、あるいはしこりとなっていた経験が新たな意味を帯びて捉え直されていく可能性があった。そして、記述の中から、他者の感覚である患者の感覚を理解するために、ケアをする自分自身が、患者に出会った時の過去の経験をその後の経験の中で捉えなおしながら気づきを深めていく経験に注目し、新たに意味づけされていく経験の成り立ちを分析した。その中から、助産師は、自覚する以前に、他者である患者に呼び掛けられ引き寄せられ、他者である患者の感覚をより患者に近い感覚で理解しようとする経験をしていることが浮かびあがった。その経験はマニュアルやガイドラインの枠を超えていくような、患者に真に向かい合おうとする姿であった。また患者とケアする助産師の間には、お互いが真に向かい合うことによって、本来的な自己になることを支える「場所になる」という経験があるということが伺われた。また、ケアそのものが、いきいきとした大いなる「いのちにふれる経験」であることが語られた。最後に、以上の語られた経験の成り立ちをふまえて、周産期の看取りのケアの中で、「いのち」をケアする事を考察した。